

一声社: TEL03-6676-2179/FAX03-6326-8150

閑話休題—噛まない犬に噛まれる

その家に用事があったわけではない。隣の家に行きたかっただけやのに…。

まだ 20 代の頃。当時住んでいたアパートの近くに長屋があった。町内会の回覧板をそこの一軒に届けるのがヨネやんの役目。初めてその長屋を訪れた時から、いや～な予感があった。敷地内に足を踏み入れた途端、猛烈な犬の鳴き声がするのだ。何度行っても、敷地内に足を踏み入れると計ったように泣き始める。その声量と継続時間は尋常ではないが、姿は一度も見た事がない。犬の知識は皆無でどんな犬種かもわからないが、「行きたくないなあ」と思わせるのには、十分な声だった。

さて、いつものように回覧板を持って長屋の敷地に足を踏み入れた途端、お昼の時報のように犬の鳴き声がする。「ええ加減、慣れんかいな」と思ったヨネやんだったが、どうもいつもとは様子が違う。違和感がある。「んん？」と見渡すと、なんと！ 犬の姿が見える。しかも、つながれていない！ なんで？ ちょっと待ってえや～！ 犬の前を通らんと、回覧板を届けられへんやん。かなわんなあ～、自由に動き回ってるやん。見たところ、スピッツのような小さな犬だ。あれくらいなら、何とかなるかも。犬を甘く見たヨネやんがさらに一步進んだ時、ガラッと戸が開いた。

「みーちゃんがあんまり鳴くから何事かと思うたら、アンタかいな。それで、何？ セールス？ うちは何も買わんで！」

「いやあ～。すみません。お隣の A さんに回覧板を届けに来たんです。セールスち

やいます」「なんや、回覧板か。ほな、通って！」「でも、犬が…」「なんや、アンタ大人のくせに犬が怖いんかいな。だらしのないなあ。大丈夫や」「いやしかし、えらい勢いで鳴いてますけど」「大丈夫やって！ ウチを信用できひんのか？」

そこまで言うなら…と、さらに数歩進んだものの、犬は一層吠え立て、牙をむき始めた。「また今度にしますわ」。帰ろうとしたヨネやんにお婆さんは気分を害したのか、さらに詰め寄る。

「うちのみーちゃんが人を噛んだりするかいな」「でも、牙むいてまっせ」「はよ通り！ いつまでもアンタがそこにおるから泣き止まへんねん！ はよ！ はよ！」

そこまで言うならと意を決して進んだヨネやん。鳴き声は頂点に達する。「うちのかわいいみーちゃんはなあ、よう躡られてんねん。今日はちょっとおかしいだけや。アンタがよっぽど怪しいんやろな。みーちゃんが人を噛むなんてこと絶対……、あっ！ 噛んでるなあ～！」

ヨネやんは足を噛まれた！ G パンに噛みついて離そうとしない。幸い犬の牙は足をかすめただけで、足そのものはかすり傷だったが…。「噛んでますよ！」

「ウソやろ？ みーちゃんに限って！ 大丈夫か？」「まあ、ズボンが破れただけ…」「アンタとちやうわ！ みーちゃんや！ かわいそうに。口、怪我してへんか？ 変なモン噛んでしもたなあ…」

そう言いながら犬を抱いて静かに家に入って鍵を閉めてしまったお婆さん。お詫びの一言もなく、文句を言う機会さえ与えないフェードアウトの仕方。やるなあ、アンタ。そこまで開き直ったら立派ですわ。